

研究報告

南海トラフ地震で孤立化が予想される地域に暮らす 高齢者の準備期の災害対策

Disaster measures in the preparatory phase of elderly who live in the predictively isolated area by Great Nankai Trough Earthquake

上村 倫加 (Tomoka Uemura)*
筒井 理紗 (Risa Tsutsui)**
松井 琴乃 (Kotono Matsui)***

岡島 ふじの (Fujino Okajima)**
西尾 里菜 (Rina Nishio)**
石川 麻衣 (Mai Ishikawa)****

要 約

南海トラフ地震で孤立化が予想される地域に暮らす高齢者の準備期の災害対策を明らかにすることを目的に、65歳以上の高齢者5名にインタビューを行い、質的統合法（KJ法）を用いて分析した。その結果、南海トラフ地震で孤立化が予想される地域に暮らす高齢者の準備期の災害対策は、【災害に限らない緊急時の備え】、【諦めつつもできることを精一杯したい】、【自分なりにできることはしたい】、【地域の課題によって孤立化への恐怖心が増大】、【経験と想像を活かした災害対策】、【災害被害予測から考えた地区ごとの災害対策】、【しなくても良いと判断した災害対策】の7つに集約された。災害対策を強化するための支援として、高齢者が災害対策の必要性を自覚しできる範囲を拡大する支援、高齢者ができている災害対策の強化、高齢者の災害対策につながる情報の提供、地域防災力の強化の4つが必要だと考えた。

キーワード：孤立化 高齢者 準備期 災害対策

I. はじめに

我が国は地震国であり、国全体で平常時から災害へ備えておく取り組みが必要である。高知県では近い将来に南海トラフ地震が起こると予想されている（高知県防災会議，2014）。高知県の特徴として厳しい地形や太平洋に面する沿岸地域が多いため、南海トラフ地震が起こることによって多くの集落が孤立する等、甚大な被害がもたらされると考えられている。

災害時に孤立化が予想される地域に暮らす高齢者の災害対策は、特に重要な課題である。災害時は、ライフラインや物流が途絶えることにより物資が不足することが予想されるが、災害時に孤立化が予想される地域は、ライフラインや物流の回復に時間がかかることでより物資が限られる。そのため、孤立化が予想される地域

は地域での助け合いや、自分自身での備えがより必要となる。また、高齢者は、身体機能や認知機能の低下があり、災害時に被害を受けやすい。しかし、災害時の準備意識が低いことや、高齢者の特性により他者からの助けを遠慮しがちであること（片田，2002）が指摘されている。よって、災害時に孤立化が予想される地域に暮らす高齢者が、物資の限られた中で生活することはより困難であると予想されるため、災害が起こる前から準備をしておくことが重要である。

災害時の看護職者に求められる機能・役割については、複数の報告がある。尾田（2012）は、平常時からの体制づくりの重要性を示し、花崎（2012）も同様に、平時から有事に備える準備力と組織力を強化する必要性を示している。災害サイクルの中の準備期における看護職者の機能・役割について岩村（2014）は、(1) 所属部

*高知大学医学部附属病院

**高知医療センター

***県立広島大学助産学専攻科

****群馬大学大学院保健学研究科

署・組織の災害対策推進、(2) 関係機関や住民との連携に基づく災害に備えた体制整備、(3) 対象者の災害時の支援ニーズ把握と事前指導、(4) 災害対応・準備に関する研鑽、(5) 派遣活動の準備の5つに分類している。また、災害時に孤立化が予想される地域で看護職者が平常時におこなうべき援助についての研究（三宅他，2013）や、住民の災害対策についての量的な研究（日々野他，2013）がおこなわれているが、市町村の保健部門における災害時に備える平常時の取り組みが少ないことが全国規模の調査（牛尾他，2004）で示されている。これに関連して、青木ら（2006）は、看護職者が災害サイクルにおける準備期におこなう取り組みに対してはイメージができていないと述べている。どのような災害対策支援をおこなえばよいかを具体的にイメージするためには、支援対象の実態をより深く理解する必要がある。

そこで、筆者らは、高齢者の暮らす地域環境・コミュニティや個人特性と、高齢者自身がおこなう災害対策の意識・考え・思いを関連させて捉えることで、高齢者の災害対策の実態が浮き彫りとなり、そこから、準備期における高齢者の災害対策を強化するための看護職の支援について示唆が得られるのではないかと考え、本研究に取り組んだ。

以上より、本研究では、南海トラフ地震で孤立化が予想される地域に暮らす高齢者の準備期の災害対策を明らかにすることを目的とした。今後、地域の看護職者が活動するにあたって、災害時に孤立化が予想される地域に暮らす高齢者に対する災害対策支援の一助となり、その地域に暮らす高齢者の災害対策が強化され、災害被害をなるべく小さくできると考えた。

II. 研究枠組み

本研究では、災害サイクルにおける準備期（山本，1999）の個人や世帯の災害対策を、安全を守るための対策と健康生活を守るための対策の2つに分類できると考えた。安全を守るための対策とは、災害時に起こる危険から命を守るための対策を指す。災害時における身体へのダメージを回避し、生命維持活動の確保を目指

すことであり、具体的には家具や家電の固定、住宅の耐震化、避難経路の整備や確認、過去の災害体験を活かすこと等である。健康生活を守るための対策とは、衣食住が保たれ、心身を病むことなく、災害時における生活の質を保つことであり、具体的には、非常用持ち出し袋や備蓄品の準備、地震保険の加入に加えて、日頃からの近隣住民同士の交流や自主防災組織活動への参加等である。

災害対策の対象者と実施者について、本研究では、高齢者自身のための高齢者自身の行為として捉えることとした。行為とは、人が自発的におこなう意思活動（松村，2006）を指す。しかし、本研究では、その具体的行動が本来は別の目的によって行われており、災害被害の軽減を意図していなかったとしても、災害被害をなるべく小さくするという目的に合致すると客観的に判断できる場合、全て災害対策の行為として捉えることとした。

III. 用語の定義

- ・孤立化が予想される地域：中山間地域、沿岸地域、島嶼部等の地区及び集落のうち、浸水や土砂災害により外部からのアクセスが途絶し、人の移動や物資の流通が困難もしくは不可能となる可能性のある地域
- ・高齢者の災害対策：予想される災害被害をなるべく小さくするという目的に合致する高齢者自身の行為
- ・安全を守るための対策：災害時に起こる危険から命を守るための行為
- ・健康生活を守るための対策：衣食住が保たれ、心身を病むことなく、災害時における生活の質を保つための行為
- ・準備期：被災から復興し次の災害に備えて準備をおこなう時期

IV. 研究方法

1. 研究デザイン

質的帰納的研究方法

2. 研究対象

南海トラフ地震により高知県内で孤立化する可能性のある地区に暮らすADLの自立している65歳以上の高齢者5名。

3. 調査方法

「安全を守る対策」と「健康生活を守る対策」について、文献検討をもとに独自にインタビューガイドを作成し、半構造的面接をおこなった。調査員は対象者1名に対し2～3名でおこなった。調査期間は、2016年8月から9月の間であった。

4. 分析方法

質的統合法 (KJ法) (山浦, 2012) を用い、個別分析ののち、全体分析をおこなった。インタビュー後に逐語録を作成し、逐語録の中から、高齢者の災害対策の行為が表れている部分を抽出し、元の意味を損なわないよう簡潔な言葉でまとめ、1つのラベルに1つの意味が含まれるよう単位化ラベルを作成した。

個別分析では、対象者毎に、それぞれのラベルの類似性に着目して2～5枚程度集めてグループ化し、集まったラベル全体の意味を一文で表し新たなラベルとした。この作業を5～8つのグループになるまで繰り返し実施し、最終ラベルを得た。

次に、全体分析をおこなった。個別分析の最終ラベルを用いて個別分析と同様の分析をおこない、得られた最終ラベルをその関係性に着目して配置し、空間配置図を作成した。その後、全体の構造と最終ラベルの関係性を踏まえ、ラベルの意味内容を端的に表すシンボルマークを付した。

5. 倫理的配慮

高知県立大学看護研究倫理審査委員会の承認を得て本研究を実施した。対象市町村の保健福祉担当部署に研究の目的、方法、意義、およびプライバシーの保護、対象者に対して行う倫理的配慮について文書及び口頭で説明し、書面にて承諾を得た。対象市町村の保健師より紹介を受けた対象者に対し、研究の主旨およびプライバシーの保護、研究参加の自由意志の保証、協

力の撤回の自由、研究結果の公表方法について文書及び口頭で説明し、書面にて同意を得た。

V. 結 果

1. 対象地域の概要

南海トラフ地震により高知県内で孤立する可能性のある地区として、一町 (以下X町と記す) のKR地区、KK地区、Y地区、O地区を選定した。X町は「東南海・南海地震に係る地震防災対策の推進に関する特別措置法」に基づき、「東南海・南海地震が発生した場合に著しい地震災害が生ずるおそれがあるため、地震防災対策を推進する必要がある地域」と指定されている。また、X町の主要な道路は急傾斜崩壊危険箇所、土石流危険渓流・区域にあるため、南海トラフ地震時に封鎖され、孤立する可能性がある。

X町は人口1万人以下の、高齢化率40%を超える町である。X町は海岸部と海拔300m以上の山々に囲まれた台地部に二分されており、KR地区、KK地区、Y地区は海岸部、O地区は台地部に位置している。X町は昭和21年の南海地震を経験しており、KR地区は半分が浸水、KK地区は一部が浸水、O地区は山崩れや崖崩れが多く交通が寸断された (X町地域防災計画 [地震・津波災害対策編]、2015より抜粋)。

対象地域の津波の最大予想は、KR地区で10m、到達時間は5分、KK地区で15m、到達時間は早いところで5分、Y地区は20m、到達時間は10分である。O地区は海拔が300mあり、津波の被害はないと考えられている。

2. 対象者の概要

対象者は以下 (表1) の5名である。インタビュー時間は平均60分であった。

3. 高齢者の準備期の災害対策

A氏、B氏、C氏、D氏、E氏の個別分析の最終ラベル35枚を用い、グループ化を4回おこなった。その結果、【災害に限らない緊急時の備え】をはじめとする7つのシンボルマークに集約された。以下、全体分析のシンボルマークを【 】で、最終ラベルを《 》で示す。

表1 対象者の概要

	A 氏	B 氏	C 氏	D 氏	E 氏
年齢	80代	70代	80代	70代	70代
性別	男性	男性	男性	女性	女性
居住地	K R地区 川沿い	K R地区の中心地 浜まで3～5分	O地区	K K地区 50m先が海	Y地区 浜に近い 海拔3m
職業・役職	なし 老人クラブに所属 自主防災組織の会員	元自衛官	なし 元消防団員	なし	なし 自主活動の世話役
日中の方 過ごし方	不明	散歩 畑仕事	家事 福祉センターに通う	草引き 教会に通う	不明
既往歴	通院中（病名不明）	心疾患 血液凝固剤服用中	なし	高血圧 （K K地区通院） 眼疾患（隣町通院）	通院中（病名不明）
家族構成	4人（妻、孫夫婦）	2人（妻）	独居	2人（息子）	独居
被災経験	昭和21年南海地震	昭和21年南海地震 仕事で災害派遣2回	昭和21年南海地震	昭和21年南海地震 台風	なし

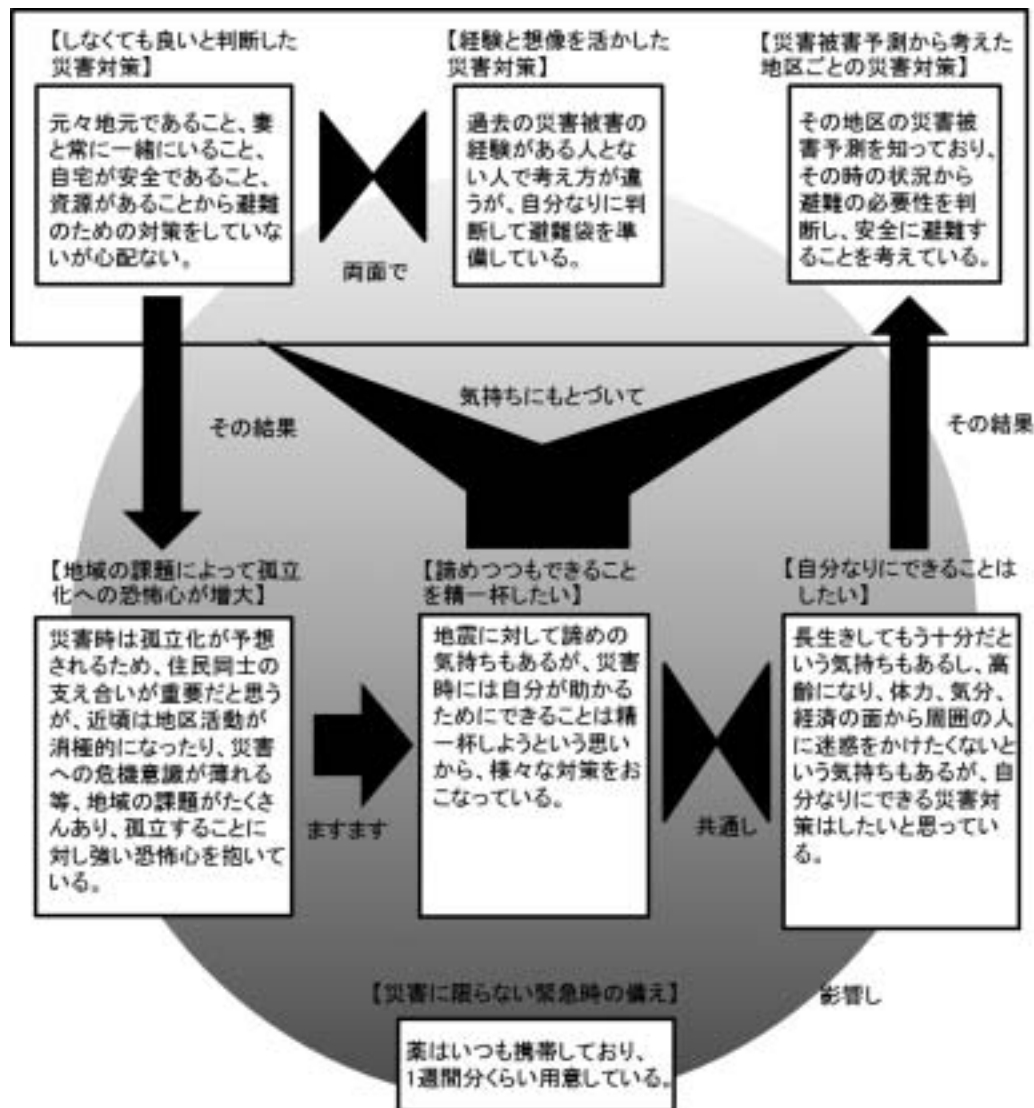


図1 高齢者の準備期の災害対策

南海トラフ地震で孤立化が予想される地域に暮らす高齢者は、【災害に限らない緊急時の備え】を行っており、これが準備期の災害対策に影響していた。地震に対し【諦めつつもできることを精一杯したい】という気持ちを抱いており、この気持ちに基づいて災害対策を実施していた。災害対策として、【経験と想像を活かした災害対策】と【災害被害予測から考えた地区ごとの災害対策】をおこなっていたが、対照的に【しなくても良いと判断した災害対策】もあり、このような対策は実施していなかった。周りに迷惑をかけないよう【自分なりにできることはしたい】という思いから、【災害被害予測から考えた地区ごとの災害対策】を取るようしていた。【しなくても良いと判断した災害対策】の中には避難訓練等、地区単位の災害対策が含まれており、その結果、地区の活動が活発でなくなると、それが地区の課題となる。このような【地域の課題によって孤立化への恐怖心が増大】し、それが【諦めつつもできることを精一杯したい】という気持ちを強めていた。

1) 【災害に限らない緊急時の備え】

このシンボルマークの最終ラベルは、《薬はいつも携帯しており、1週間分くらい用意している》というものであった。災害に限らず、常に薬を準備していた。

2) 【諦めつつもできることを精一杯したい】

このシンボルマークの最終ラベルは、《地震に対して諦めの気持ちもあるが、災害時には自分が助かるためにできることは精一杯しようという思いから、様々な対策をおこなっている》というものであった。地震発生後は自宅が倒壊から免れても海から近いので、津波によって自宅が流される可能性が高く、地震対策は意味がないと諦めの気持ちがあった。災害時は自分が助かるために精一杯になり、人を助ける余裕がなく、自分が逃げることを一番に優先すると考えていた。諦めの気持ちもあるが、災害時に守ってもらえるようにお宮さんの掃除をして願をかけていた。

3) 【自分なりにできることはしたい】

このシンボルマークの最終ラベルは、《長生きしてもう十分だという気持ちもあるし、高齢になり、体力、気分、経済面からまわりの人に迷惑をかけたくないという気持ちもあるが、自分なりにできる災害対策はしたいと思っている》というものであった。災害対策をおこなっているが、高齢になり自分の持ち物の整理や部屋の片づけ、耐震診断や保険の加入など全てはできないと考えていた。また、高齢になると周囲の人に迷惑をかけたくないという気持ちから地区活動も遠慮するようになった。しかし、自分で自分の身を守るように避難物品の準備や家具の固定など自分なりにできることはしたいと思っていた。

4) 【地域の課題によって孤立化への恐怖心が増大】

このシンボルマークの最終ラベルは、《災害時は孤立化が予想されるため、住民同士の支え合いが重要だと思うが、近頃は地区活動が消極的になったり、災害への危機意識が薄れる等、地域の課題がたくさんあり、孤立することに対し強い恐怖心を抱いている》というものであった。災害時は住民同士の支え合いが重要だと思っているが、昔より住民が少なくなっており、近所付き合いが希薄化していることや、他の地区と比べ自主防災組織な活動が活発ではないこと、若者に防災に取り組んでほしいという思いがあるが、災害経験のない若者にはイメージできないこと、地震が来ると言われることに慣れてしまうといった、多くの課題があると感じていた。その課題がさらに孤立化への恐怖心を増大させていた。

5) 【経験と想像を活かした災害対策】

このシンボルマークの最終ラベルは、《過去の災害被害の経験がある人とない人で考え方が違うが、自分なりに判断して避難袋を準備している》というものであった。災害被害の経験がある対象者はその経験をもとに、また経験のない対象者は想像がつきづらいことを自覚しつつ、過去の災害からの学びや仕事の経験から自分で判断して、非常時の持ち出し品を準備・管理していた。

6) 【災害被害予測から考えた地区ごとの災害対策】

このシンボルマークの最終ラベルは、「その地区の災害被害予測を知っており、その時の状況から避難の必要性を判断し、安全に避難することを考えている」というものであった。地区によって津波の災害被害予測をテレビや新聞で知っており、地区ごとの海拔、津波の高さや速さ、自分の状態から、避難の必要性の有無を判断し、一番安全と思われる避難経路や避難場所を考えていた。

7) 【しなくても良いと判断した災害対策】

このシンボルマークの最終ラベルは、「元々地元であること、妻と常に一緒にいること、自宅が安全であること、資源があることから避難のための対策をしていないが心配ない」というものであった。元々地元であるため避難場所を知っており避難訓練があっても参加する必要がないと思っていた。妻と常に一緒にいるため、災害時に離れるということを考えておらず、離れた時の話はしていなかった。自宅は安全であると考えており、また自宅の周囲に山や川の資源があるため、災害時に避難する必要はないと考えていた。

VI. 考 察

1. 南海トラフ地震で孤立化が予想される地域に暮らす高齢者の準備期の災害対策

シンボルマーク毎に、各シンボルマークの内容とシンボルマーク間の関係性から、南海トラフ地震で孤立化が予想される地域に暮らす高齢者の準備期の災害対策を考察した。

1) 災害に限らない緊急時の備え

緊急時の備えとは、日常生活の中で不測の事態に備えることであり、例えば常に保険証を持ち歩くことや、折りたたみ傘を持ち歩く等がある。高齢者は、そもそも災害に限らず緊急時に備えておく必要性の高い世代だといえる。高齢者の特徴として、身体機能、認知能力、環境への適応力、免疫力、回復力の低下が挙げられ、緊急時の適応が困難になりやすい。日比野ら

(2013)の研究で、高齢者が内服薬を携帯していることが明らかになった。本研究では、対象者の5名中4名は何らかの疾患を持ち、内服薬治療を受けており、日常的に服薬する必要がある人は、緊急時を想定し薬を持ち歩いていた。また、B氏は日常生活行動で体力づくりのために運動をしており、それが迅速・円滑な避難行動を可能にすると捉えられた。このように、普段本人が災害対策を意識していなくても、日常的に行っている体力づくりが災害対策につながっていると考えられた。

日常生活行動が災害対策につながっていると述べられている文献はなかったが、災害対策を意識していなくても、高齢者が日常生活の中でおこなっていることが災害対策となっている場合があるということが示唆された。

2) 諦めつつもできることを精一杯したい

諦めの気持ちとは、南海トラフ地震の被害想定大きさから津波被害が予想されるため、地震対策は意味がないと感じることである。精一杯しようという気持ちは、自分が助かるためにできることはしたいという気持ちである。

中木ら(2013)は、老年期について、死を意識しつつ、生きることの意義と目的、人生の総仕上げについて絶えず考えている、一生で最も不安な時期であり、「もうそろそろと思う気持ちと、まだまだと思う気持ちと、その間で高齢者は毎日を生きている」と述べている。高齢者は災害被害の大きさと高齢であることを考えると助からないのではないかと思ひ諦めの気持ちがある。一方で、死の準備がまだできておらず生きたいという思いもあり、葛藤の中にあるためできる限りの災害対策をしていることが示唆された。

3) 自分なりにできることはしたい

本研究の対象者全員が南海トラフ地震を意識して災害対策をおこなっていた。

片田ら(2002)は、「高齢者は援助の必要性を感じているにも関わらず、遠慮等といった高齢者特有の意識特性から援助を求めない場合」があると指摘している。また、高齢者自身が避難援助の必要性を十分把握していないことも、

避難援助を求めない理由として存在すると主張している。

一方増田ら (2009) は、高齢者が長い歴史を生きてきた自分自身に対する誇りや自信が自尊心に影響しており、たとえ他者の援助を受けながらも、自尊心が強く存在する世代であることを指摘している。

以上より、高齢者が援助を必要とする状態であっても、判断が困難になり援助を求められない現状もあること、他者への遠慮の気持ちがあること、自尊心があることから、可能な限り自分でできることはしたいという気持ちがあると考えられた。

4) 地域の課題によって孤立化への恐怖心が増大

X町は、海岸部は津波被害が予想されており、主要な道路は急傾斜崩壊危険箇所、土石流危険渓流・区域にあるため、南海トラフ地震時に封鎖され、孤立する可能性がある。そのため、地域での助け合いが重要であり、防災に限らず普段からの地域活動を活発化することが災害被害の軽減につながる。住民同士の助け合いを強化するためには、既存の高齢者同士の活動を増やすだけでなく、若者も参加できるような環境を整えることが必要であると考えられた。

他にも対象地域は、医師の不在や消防署不足、住民の高齢化、地区活動の不活発、孤立の可能性があるため、より住民同士の助け合いが重要であると考えられた。

一方で、地震が来るといわれることへの慣れは起こりうることであるため、慣れを自覚することは地震への意識の低下を防ぐこととなると考えられた。

これらから、地域の課題が明らかになり、住民は地域が孤立することに加え地域の課題があることで恐怖心がより増大していると考えられた。

5) 経験と想像を活かした災害対策

経験のある人は経験を活かした災害対策をしているが、経験のない人は災害を想像した災害対策をおこなっていた。また、想像するためには知識をつけることが大切であることが分かった。三宅ら (2012) は、被災経験がある人とな

い人で災害対策に差がないと報告し、その理由として災害への恐怖や注意が年月の経過とともに薄れることを考察している。被災経験のある人は経験と知識を組み合わせることで具体性のある想像をすることができ、被災経験のない人は具体的な情報を得ることで想像ができるため、被災経験の有無に関わらず情報提供は必要であることが明らかとなった。

6) 災害被害予測から考えた地区ごとの災害対策

海岸部に位置するKR地区、KK地区、Y地区の対象者からは、津波を意識した発言が多く、津波から逃げるための対策が重要視されていた。一方、O地区の対象者は、自宅が一番安全と考えていた。そのため、避難をせずに家の中で安全を確保できる対策をおこない、さらに、買い物に出向くKR地区で津波に遭遇した場合の避難場所を考えていた。このように、居住地域が海岸部か台地部かで災害対策に違いがあり、さらに、自宅周辺部のみならず、生活圏の地区の被害予測を考えながら対策をおこなっていたことが分かった。特に自然災害は、ある程度の災害被害予測が可能である。自分の日常生活行動の範囲と照らし合わせ、状況に応じた災害対策を検討するためには、災害被害予測に関する情報が重要である。

7) しなくても良いと判断した災害対策

対象者は、実行可能な災害対策が複数考えられる中で、しなくても良い災害対策があると判断していた。

例えばB氏は、海の近くに自宅があり津波被害を受けることを考えると、耐震や家具の固定は無意味で必要ないと考えていた。また、避難袋を持ち出して逃げることと何も持たずそのまま逃げることを比較し、どちらがより助かる可能性が高いか考えて何も持たず逃げると決めていた。一方C氏は台地部に自宅があるため、津波被害は想定しておらず、家を新築にしたので自宅が安全だと考え避難しないと決めていた。

B氏やC氏の例は、災害の情報と自分の状況を踏まえた上で一般的な災害対策を理解したうえで、自分にとって最善の災害対策を選択しておこなっていることを示していた。

2. 看護への示唆

南海トラフ地震で孤立化が予想される地域に暮らす高齢者の準備期の災害対策を強化するための支援として、高齢者が災害対策の必要性を自覚できる範囲を拡大する支援、高齢者ができている災害対策の強化、高齢者の災害対策につながる情報の提供、地域防災力の強化の4つが示唆された。

1) 高齢者が災害対策の必要性を自覚できる範囲を拡大する支援

考察1-7)より、高齢者が災害対策をしていない理由として、無駄だという考えと全てはできないという考えが明らかになった。

無駄だという考えには、高齢で長生きしたので十分という考えや南海トラフ地震の被害予測の甚大さから災害対策に対して意味がないという考え、すでに災害対策ができているという考えがあった。豊沢(2015)は、自分に危機が及ぶ可能性を過小に評価する心の働きである楽観バイアスが、地震の備えを妨げると指摘している。無駄だと考え、災害対策をおこなわないことは被害を甚大にする可能性がある。そのため看護職者は、高齢者が無駄だと考えていることも本当に無駄であるのかを見直すことができるように働きかける必要がある。高齢者の日常生活を把握している保健師や訪問看護師、診療所の看護師等が高齢者に必要だと考えられる災害対策を一緒に考え、必要最低限の災害対策の必要性を自覚してもらい、実際に実施できるように援助をおこなうことが必要であると考えた。

全てはできないという考えには、高齢者は経済面で困難なこと、加齢による身体機能の低下や持病があること等、必要だと考える災害対策全てをおこなうのは困難だという考えがあった。そのため、保健師は高齢者の加齢による困難性を理解し、一般化された災害対策を勧めるだけでなく、個人ができる範囲の災害対策を考え提案していくことが大切であると考えた。

また、看護職者が高齢者の介護予防を継続することは、加齢による身体機能や認知機能の低下を予防し、現存機能を維持することにつながり、現在できていない範囲ができるようになり災害対策のできる範囲が拡大すると考える。そ

のため看護職者は、高齢者の災害対策のできる範囲が拡大するよう、日常からADLの維持・向上を目指した介護予防的関わりが必要である。

2) 高齢者ができている災害対策の強化

考察1-1)より、高齢者は災害を意識していなくても、日常生活でおこなっていることが、結果災害対策になっている場合があることが明らかになった。本人が気付いていない災害対策を高齢者に気付かせ、意図的に褒めることは、自分でも災害対策ができているという自信につながる。そのため看護職者は、まず、高齢者の日常生活行動を捉え、それを災害対策と結び付けてアセスメントすることが重要である。そして、それを本人や周囲にフィードバックすることで、災害対策の継続や強化につながると考える。

3) 高齢者の災害対策につながる情報の提供

考察1-5)より、災害時の具体的な想像をすることが災害対策につながるため、情報提供の必要性が明らかになった。そのため看護職者は、高齢者に具体性のある想像ができるような情報を提供する必要がある。看護職者は、住民の暮らしを把握しており、住民との関係性ができているため、個人の地域や環境、特性を踏まえたその人に必要な情報を提供することで住民が具体的な想像ができ、災害対策を効果的におこなうことができる。情報を提供する際には、自宅の被害予測のみならず個々の生活圏の被害予測まで考えることができるよう提供し、様々な状況下での対応が可能になると考えられる。

特に行政保健師は、宮崎(2012)によると全ての災害サイクルにおいて地域住民への健康支援に一貫して関わる唯一の専門職であると述べられている。保健師は行政の立場にあり、地域の情報に詳しくその人にとって必要な情報を選択し、提供できる立場である。同時に住民の声を聞くことができる立場でもあり、住民の声を行政へ伝え、地域の防災計画に反映するよう働きかけることでより地域に合わせた防災計画を立案できると考えた。その際は、時間の経過に伴い防災意識が薄れることや慣れが生じることを考慮し、時機をみて住民への情報提供を続け

ていくことが重要だと考えた。

4) 地域防災力の強化

考察1-3)より、高齢者が災害時に援助を必要とする状態であっても、他者への遠慮の気持ちがあることや援助を求める相手がいないことが明らかになった。そのためまずは高齢者に自分を客観的に見て援助が必要であると判断できるように働きかける必要がある。具体的には、災害時と一緒に想定し実際自分に起こりうることを考えてもらう。そして、他者の援助が必要になるところを自覚してもらうことで、他者へ遠慮をしている場合ではないということに気付いてもらう。

また、看護職者が助け合いを促す活動は、住民の価値観や生活行動に直接関わってくる活動であるため、住民が無理なくおこなえるように既存の組織や仕組み、ネットワーク等を用いて発展させていく方向で援助をすることが重要である。

さらに、高齢者は命に対する諦めを持っていることも明らかになったため、高齢者が自分を大切にできるよう、生きがいや自立感を失わないような援助が必要であると考えた。具体的には、看護職者が既存の住民主体の活動を支援することで住民同士のつながりを強化し、高齢者の社会的役割をつくる。そうすることで地域の団結力の強化や高齢者の生きがいとなり、地域防災力の強化になると考える。

VII. 研究の限界

本研究では対象者が5名と少なく、高齢者によって話す内容に偏りがあったため、一般化には限界があると考えた。また、対象者は地区での役割がある人や、過去に災害に関わったことのある職業をしていたため、災害に関する知識の基盤があるという特性があった。そのため今後は、災害に関する知識の基盤がない人を対象とする等、研究を積み重ねることで、高齢者の準備期の災害対策をさらに明らかにしていく必要がある。

謝辞

本研究をおこなうにあたり、看護研究の主旨にご理解くださり、対象者の方々をご紹介くださりましたX町役場の皆様、ご協力を賜りました対象者の皆様、そして、多くのお力添えを賜りました各研究対象施設の皆様に心より感謝申し上げます。

なお、本研究は、高知県立大学看護研究論文に加筆・修正を加えたものである。本研究について、開示すべき利益相反事項はない。

<引用・参考文献>

- 青木実枝, 三澤寿美, 鎌田美千子他 (2006). 災害時ヘルスケアニーズに対する保健師の役割意識, 山形保健医療研究, No.9, 1-10.
- 岩村龍子 (2014). 災害対応における看護職が果たす役割・機能と役割・機能を発揮するために必要な能力. 岐阜県立看護大学紀要, 14(1), 61-72.
- 牛尾裕子 (2004). 市町村保健師の健康危機管理機能に関する実態調査. 平成15年度厚生労働科学研究費補助金(がん予防等健康科学総合研究事業)分担研究報告書 地域の健康危機管理における保健所保健師の機能・役割に関する実証的研究(主任研究者 宮崎美砂子) 2004.
- 尾田進 (2012). 全国の自治体保健師による被災地支援について-厚生労働省保健指導室のまとめから-. 保健師ジャーナル, 68(3), 1498-199.
- 片田敏孝, 山口宙子, 寒澤秀雄 (2002). 洪水時における高齢者の避難行動と避難援助に関する研究. 福祉のまちづくり研究, 4(1), 17-26.
- 高知県防災会議 (2014). 高知県地域防災計画(地震および津波災害対策編).
- 豊沢純子 (2015). 災害に対する心の働きを踏まえた防災対策のあり方. 学校危機とメンタルケア, 8, 33-39.
- 中木里実, 多田敏子 (2013). 日本人高齢者の死生観に関する研究の現状と課題. 四国大学紀要, 41, 1-10.
- 花崎洋子 (2012). 被災地の保健師から 有事に備える準備力と組織力を. 保健師ジャーナル,

- 68(3), 172-176.
- 日比野直子, 磯和勅子, 平松万由子他 (2013). A県南部の過疎地域に居住する高齢者の防災意識と準備状況の実態, 日本災害看護学会誌, 15(2), 25-36.
- 増田由実子, 西片久美子 (2009). 学生が学んだ「自尊心を大切にする関わり」－高齢認知症患者のケアを通して－. 日本赤十字看護学会誌, 9(1), 42-48.
- 松村明編 (2006). 大辞林 第三版. 三省堂.
- 三宅弘江, 中谷久恵 (2013). 中山間地における一人暮らし高齢者の災害に対する備えとソーシャルサポート. 日本災害看護学会誌, 14(2), 49-57.
- 宮崎美砂子 (2012). 第2部 各論, 酒井明子, 菊池志津子. NiCE災害看護 看護の専門知識を統合して実践につなげる, 南江堂, 204-205.
- 山浦晴男 (2012) 質的統合法入門 考え方と手順, 第1版, 医学書院.
- 山本保博, 鵜飼卓監修 (1999) トリアージ: その意義と実際, 荘道社.